

授業「キャンプ実習」に関する研究(4)

— 4ヶ年の基礎研究と総合評価 —

中村 哲士, 保井 俊英, 會田 宏, 小柳 好生, 中西 匠
永田 隆子, 田中 繁宏, 西坂 珠美, 松岡紗也香, 野老 稔
(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

Research on the Lesson of “Camp training” (4)

— Basic Research into Four Years and Comprehensive Evaluation —

Tetsushi Nakamura, Toshihide Yasui, Hiroshi Aida, Yoshio Koyanagi, Takumi Nakanishi
Ryuko Nagata, Shigehiro Tanaka, Tamami Nishizaka, Sayaka Matsuoka, Minoru Tokoro

*Department of Health and Sports, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

This research of the fourth stage executed mainly the comparison of the basic researches into four years. The chief purpose was clarification of a universal part of four years.

The results were summarized as follows:

1. The reason for participation was “Cheap expenditure” and “Course credit”. The expected program was “Observation of constellation” and “Outdoors cooking”. The expectation and the acquisition target were “Enjoyment”, “Safety” and “Peace”.
2. This year's problem was a discovery of the method of thoroughly improving students' knowledge and technologies.
3. Students' leadership was extent to be able to do “Life guidance” and “Standard program”.
4. The factor analysis has extracted the following six factors. “Mutual guidance and Consideration”, “Impartiality and Democratic”, “Inspiration and Commitment”, “Active collaboration and Device”, “Pleasant sharing” and “Self management and Health condition”.
5. The attitude to the students' outdoors activities has changed independent and positively. The practice gave the good influence to students' “Standpoint and Attitude”. The practice was effective in “Understanding and Goodwill” to nature. There was a difficulty of controlling the influence by the weather when doing outdoor sports.

緒言

指導者養成としての授業「キャンプ実習」のあり方の解明について、正確で適切な評価方法の構築と、縦断的・横断的な調査・研究の蓄積が必要であると考え、一連の研究に着手した。研究目的に、養成課程に存在する組織、指導者、プログラム、施設・設備、実習生に関わる質的向上の問題解決を置き、①診断的

評価方法、②形成的評価方法、③総合的評価方法の3点を解明することを主な研究方法として、複数年にわたる継続研究を予定した¹⁾。

第3報までで報告するに至った傾向は、1)参加実習の選択を「参加料金の安さ」「単位の関係」で行い、「思い出づくり」「楽しさの体験」「自然とのふれあい体験」「友達との人間関係づくり」「キャンピングの知識・技術の習得」に対して期待感を持ち、「星座観察」「野外調理」というプログラムを楽しみに、自己の習得目標を「基本技術」「安全な方法」としている点は、普遍部分として捉えられた。過去2年の傾向とは別に、何かを習得する授業、自己の能力を向上させる授業として捉えようとしている部分がうかがえ、実習に対する取り組み方や積極性については、学年間においてややレベル差のあることが明らかとなった²⁾³⁾⁴⁾。2)キャンプ実習前の学習や準備については、年ごとに特徴はあるものの不足状況にあることが否定できず、方法の再考と時間の確保が重要な課題と指摘された。過去のキャンプ経験には、時代変化の影響が含まれているようであり、学生たちが実習に望むにあたって自覚しておかなければならない一様性についての検討も、新たな課題に加えられた²⁾³⁾⁴⁾。3)現在のキャンプ実習のスタイルでは、生活指導インストラクター程度や一般的プログラムの運営・指導程度なら、実行力・指導力の獲得も可能と予測された。しかし、各プログラムを主任となって運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持たせるためには、知識や自信を獲得させられるだけの物理的時間確保が、新たな問題として指摘された²⁾³⁾⁴⁾。4)満足感・達成感を構成する要因についての3ヶ年を総合した分析結果から、「民主・公平のものと義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」は、実習成否の鍵を握る重要な要因であると判断した²⁾³⁾⁴⁾。5)野外活動・共同活動・自然に対する考え方や行動の実習前後の比較では、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していること、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていること、特に、ルール、マナー、責任、役割、考え方などに多大な好影響を及ぼしていることが予測された。本実習のスタイルでも、自然に対する理解や好意に関する面への効用は充分期待できることが明らかとされた²⁾³⁾⁴⁾。

第4報となる今回は、大学における1サイクルといえる4年分の資料収集から、本年度の状況評価を行うとともに、各年の実習に共通する普遍部分の解明と、最終的総合評価へつなげようとするものである。また、上述2)3)の指摘から、物理的時間確保の問題解決の第一歩として、本年度から事前教育(課外におけるオリエンテーション形式)の時間・回数の増加を試みた。よって、その部分の効果の把握も同時に行うものとした。

方 法

1. 実習の概要と分析の対象

(1) 実習の概要

本年度の実習は、目的・目標、システム、担当指導教員、場所、期間等のほぼ全てを昨年までと同様⁵⁾とし、時期のみ学年暦の関係から7月4日から7月8日の4泊5日に変更して実施した(Table 1)。

新たに導入・増加させた事前教育(オリエンテーション)の時期・内容は以下のとおりである。

- ①第1回4月25日：実習全般の説明と参加者の確定 90分
- ②第2回5月23日：班編成、役割・研究課題の分担 90分
- ③第3回6月20日：準備等の進行状況確認 90分

(2) 分析の対象

分析の対象者は、大学・短大ともに2年生で開講されている「キャンプ実習」という選択必修科目を、平成18年度に履修した114名の学生である。そのうち有効回答として今回の研究に採用したのは、欠席、無効回答を除く102名であった。

Table 1. キャンプ実習の日程・日課

TIME	1日	2日		3日		4日		5日	
	出発準備	起床		起床		起床		起床	
7:00	学生集合	朝の集い		朝の集い		朝の集い		朝の集い	
8:00	大学出発	朝食		朝食		朝食		朝食	
9:00	昼食 現地到着 開講式 環境整備 夕食 入浴 オリエンテーション 班長会議 消燈	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	奉仕活動	
10:00		登山 (昼食)	O・L 学習会	スポーツ 活動	スポーツ 活動	O・L 学習会	登山 (昼食)	閉講式	
11:00			O・L (昼食)	昼食		O・L (昼食)		登山 (昼食)	現地出発 昼食
12:00				ロープワーク	スポーツ				
13:00				ハンドクラフト	活動				
14:00		自然探索		自由行動				大学到着 備品整理 解散	
15:00		夕食		夕食		夕食			
16:00		入浴	夕食	入浴	夕食	入浴	夕食		
17:00		夕食	入浴	夕食	入浴	夕食	入浴		
18:00		入浴	夕食	入浴	入浴	夕食	夕食	入浴	
19:00	星座観察		歌唱・フォークダンス		キャンプファイヤー				
20:00									
21:00	班長会議		班長会議		班長会議				
22:00	消燈		消燈		消燈				

2. 調査の内容と方法

(1) 調査内容

調査内容は昨年度までとまったく同様とし、〔事前調査〕と〔事後調査〕の2回を計画した⁶⁾。

(2) 調査方法

調査方法も昨年度までと同様、集合調査方法を用いた記名方式で実施した⁷⁾。

3. 分析の内容と方法

今回の研究は、過去3回の研究との比較研究である。実施年度や参加学生に関わらず、実習自体から得られる純粋な貢献度を測定したいため、「参加者の意識・行動・学習・達成レベル」に焦点をあてた分析の内容や方法については、昨年度までと全く同一にして実施した⁸⁾。

結果と考察

1. 参加理由と習得目標

実習参加理由については、「参加料金の安さ」「単位の関係」の2項目が4年間ともに上位回答項目となった。その他の上位項目「友達といきたかった」「キャンプが好き」「キャンプの知識や技術の向上」は、各年とも常に上位にランクされつつも順位は変動している(Table 2)。期待するプログラムにおいては、「野外調理」「星座観察」「キャンプファイヤー」「登山」が4年間全く同様に上位回答項目となった。30%以上の回答率を得た項目も、「星座観察」と「野外調理」の2項目は、4ヶ年とも同様の結果となった(Table 3)。

参加料金の安さと単位取得を優先した実習選択をし、日常、擬似的にでも体験することが困難な活動をとおして、友人と楽しみを共有したいとする立場は、4ヶ年とも揺るぎはないようであり、参加者の普遍的意識と推測した。

キャンプ実習に対する期待については、昨年度と異なり「思い出づくり」「友達との人間関係づくり」への回答率が上がり、一昨年に近い傾向を示した(Table 4)。習得目標については、「基本技術」「共同生活のあり方」は今年も上位にランクされたが、ここでも、昨年度と異なり「安全な方法」への回答率が上がり、一昨年に近い傾向がうかがわれた。加えて、「ルール・マナー」への回答率も高くなっている(Table 5)。

本年度参加の学生たちの回答傾向は、実習経費が安価であること、単位取得と基本的体験を参加目標に

(中村)

項目	N = 102
	%
1. 参加料金が安い	54.90
2. 単位の関係上	37.25
3. 友達といきたかった	36.27
4. キャンプが好き	28.43
5. キャンピングの知識や技術の向上	22.55
6. 新たな友達ができそうだった	16.67
7. キャンプをしたことがない	14.71
8. キャンピングの指導力向上	12.75
9. 学科の実習で安心	6.86
10. その他	2.94
11. 大学教員の引率・指導	1.96
12. 不明	1.96

項目	N = 102
	%
1. 星座観察	47.06
2. 野外調理	38.24
3. キャンプファイヤー	32.35
4. 登山	28.43
5. オリエンテーリング	26.47
6. スポーツ活動	21.57
7. ロープワーク	16.67
8. ハンドクラフト	14.71
9. テントの設営・撤収	11.76
10. フォークダンス	7.84
11. 不明	3.92
12. 奉仕活動	2.94
13. その他	1.96
14. 歌唱	0.98
15. 開・閉講式	0.98
16. 朝の集い	0.00

項目	N = 102
	%
1. 思い出づくり	74.51
2. キャンプの楽しさを体験	63.73
3. 友達との人間関係づくり	62.75
4. 自然とのふれあい体験	46.08
5. キャンピングの知識・技術の習得	44.12
6. キャンピングの指導力の向上	21.57
7. 不明	1.96
8. その他	0.00

項目	N = 102
	%
1. 基本的なキャンピング技術	65.69
2. 安全なキャンピングの方法	46.08
3. 野外における適切な共同生活のあり方	34.31
4. 自然と共生するためのルール・マナー	32.35
5. キャンピングの指導方法	25.49
6. 各プログラムの計画・実施方法	12.75
7. 不明	0.98
8. その他	0.00

置いていること、自然環境下での体験を通じ、友人と時や楽しさを共有したいという過去の結果と同様な部分の変化はみられない。しかし、昨年の傾向である「習得のための授業」「自己の能力向上のための授業」として捉えようとしていた部分は消失傾向にあり、一昨年までの傾向である「楽しみ」「安全」「平和」志向が強めに現れている。実習に対する取り組み方や積極性については、本年度の結果からも学年間においてレベル差が生じることが明らかとなった。

普遍部分として捉えられる項目は、参加理由については「参加料金の安さ」「単位の関係」、プログラムについては「星座観察」「野外調理」、期待については「楽しみの体験」、習得目標については「基本技術」「安全な方法」が挙げられる。

2. 経験・技術と事前学習の自己評価

本年度参加学生のキャンプ経験については、昨年の傾向とは逆に学校における経験量が増加している (Table 6.)。キャンプ技術の自己評価についても、昨年とは逆に野外調理に関わる技術向上がみられ、一昨年までの回答傾向と類似している (Table 7.)。

キャンプ経験については、これまでどおり1人2～3回程度の経験量と解釈して妥当であると判断されるが、キャンプ技術に関しては、どのようなケースで経験したかが重要となり、本年度のように学校が主

授業「キャンプ実習」に関する研究(4)

Table 6. キャンプ経験 N=102

項目	%
1. 大学の宿泊研修で経験	59.80
2. 高等学校までの林間学校で経験	50.00
3. 家族とのキャンプ経験	28.43
4. 初めて	12.75
5. 友人とのキャンプ経験	8.82
6. 地域でのキャンプ経験	7.84
7. YMCA などでのキャンプ経験	2.94
8. その他	2.94
9. キャンプのリーダーを経験	1.96
10. キャンプ関係の団体に所属	0.98
11. 不明	0.98
12. ガールスカウトでの経験	0.00

Table 7. キャンプ技術 N=102

項目	%
1. 飯盒(コッヘル)炊飯	47.06
2. 野外調理	43.14
3. マキでの火おこし	41.18
4. 刃物の安全な使用	30.39
5. 不明	20.59
6. テントの設営・撤収	17.65
7. かまど造り	14.71
8. 天気図・気象予測	1.96
9. 食用植物の採取と調理	1.96
10. 方位・距離・地図	0.98
11. ロープワーク	0.00

催するキャンプ活動への参加者が多い場合、皆がほぼ同様な経験を有し技術を獲得している可能性が高くなるものと推測される。このことも昨年とは逆の傾向として受け止められた。

事前の準備や学習の量、オリエンテーションや要項等の作用、適応能力や期待の程度、班員とのコミュニケーションについては、全ての回答傾向が昨年と類似している (Table 8.)。

昨年までの研究結果からの反省をもとに、事前学習に関する方法の再考と時間の確保の問題解決のため、本年度から事前教育時間の延長を試みた。よって、本来ならこの部分の意識・行動に対し好影響がもたらされていなければならないことになる。しかし、結果は、昨年までとほぼ同様の結果としか判定できず、1～2回、1回90分ほどの事前教育時間の延長程度では、著しい効果は得られないことがうかがわれた。

Table 8. 事前の自己評価 N=102 (%)

項目	5	4	3	2	1	不明
1. 準備段階における班員とのコミュニケーション	30.39	50.00	17.65	0.98	0.98	0.00
2. 個人の知識や技術に関する事前学習	0.00	6.86	34.31	34.31	24.51	0.00
3. 役割担当に関する事前の学習や準備	0.98	19.61	47.06	22.55	9.80	0.00
4. 個人的用具の準備	9.80	50.98	32.35	4.90	1.96	0.00
5. オリエンテーションや実習要項の有効作用	16.67	51.96	26.47	3.92	0.98	0.00
6. 個人の環境変化の対する適応能力	6.86	20.59	66.67	4.90	0.98	0.00
7. キャンプ実習直前の期待	29.41	21.57	39.22	8.82	0.98	0.00

※ 5 = とても高次, 4 = やや高次, 3 = 平均的, 2 = やや低次, 1 = とても低次

事前の自己評価の分析から、事前学習に関する方法の再考と時間の確保が重要な課題であることは間違いないことであろうが、学習時間を多少増加させたところでその意識・行動に大きな変化は与えられず、実習に望むにあたって一様に自覚しておかなければならない事柄についての検討がなされたうえで、内容・方法が吟味されるべきと判断した。

3. 実行力と指導力の獲得

実習で行われた各プログラムについて、自分自身の実行力と指導力に関して自己評価をしてもらった。評価は、本年も「とても自信がついた」から「まったく自信がない」までの5段階評価とした (Table 9.)。

昨年までと同様に上位項目に着目すると、実行力・指導力ともに上位にランクされ一致したのは、「飯盒炊飯」「刃物(ナイフ・ナタ等)の使用」「野外調理」「火おこしとマキの組み方」の4項目であり、例年ど

Table 9. 実行力と指導力の自己評価

N = 102

項目	実行力		指導力		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
4. 飯盒炊飯	4.25	0.77	4.04	0.81	2.893	*
6. 刃物(ナイフ・ナタ等)の使用	4.19	0.77	4.09	0.77	1.554	
5. 野外調理	4.19	0.79	3.99	0.81	2.998	**
3. 火おこしとマキの組み方	4.18	0.99	4.09	0.89	1.488	
16. キャンプファイヤー	4.18	0.76	3.90	0.81	4.388	***
12. ハンドクラフト	4.10	0.79	3.96	0.77	2.201	*
13. スポーツ活動	4.02	0.77	3.95	0.76	0.980	
8. 登山	3.96	0.78	3.76	0.76	2.658	**
7. 朝の集い	3.94	0.83	3.88	0.75	0.948	
9. オリエンテーリング	3.89	0.90	3.79	0.89	1.342	
2. テントの管理	3.84	0.78	3.80	0.73	0.564	
25. 奉仕活動	3.79	0.86	3.80	0.89	-0.127	
14. 歌唱	3.75	0.82	3.61	0.89	1.768	*
19. 方位の判定	3.73	1.16	3.38	1.17	4.320	***
17. 野外ゲーム	3.70	0.83	3.62	0.81	1.269	
1. テントの設営・撤収	3.69	0.87	3.62	0.77	1.000	
15. フォークダンス	3.67	0.89	3.54	0.94	1.625	
21. 地図	3.63	1.01	3.37	1.03	3.477	***
11. ロープ結策法	3.62	0.81	3.50	0.88	1.922	*
24. 自然観察	3.62	0.89	3.45	0.92	2.257	*
20. 距離の測定	3.31	1.01	3.08	1.01	3.074	**
18. スタンツ(寸劇)	3.25	0.90	3.16	0.92	1.483	
10. 星座観察	3.19	0.89	3.19	0.85	0.000	
22. 天気図	2.83	0.89	2.77	0.93	0.773	
23. 気象予測	2.78	0.92	2.78	0.97	0.000	

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

おりの評価となった。「登山」については、順位・平均値ともに大幅な変動はなく、今年も10位内にランクされた。4年間で変動の大きかった項目は、「奉仕活動」「キャンプファイヤー」「フォークダンス」「歌唱」「ハンドクラフト」「オリエンテーリング」「野外ゲーム」であり、経験豊富で楽しみ方の仕方を身につけている近年の学生とはいえ、その日の天候やその場の雰囲気の影響されやすいプログラムについては、各年ごとにその評価は違ってくることが明らかとなった。

平均値の差の比較においては、指導力の評価が実行力の評価を上回った項目は、「奉仕活動」の1項目のみであったが、有意差は認められず、その他の項目はすべて指導力の評価が下回った。

本年も、実行力・指導力のいずれに関しても得手不得手に大きな差はないと判断されるが、班を担当し生活指導を行うインストラクター程度の活動に加えて、ごく一般的に実施されている組織キャンプに組み込まれるプログラム程度ならば、初歩的に運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持つまでに至っている可能性がうかがえた。

4年目と昨年までの評価順位を比べてみても、「野外調理」「飯盒炊飯」「火おこしとマキの組み方」「刃物(ナイフ・ナタ等)の使用」「スポーツ活動」「登山」「朝の集い」の7項目が、実行力・指導力ともに上位ランクで一致し、逆に、「テントの設営・撤収」「ロープ結策法」「スタンツ(寸劇)」「地図」「自然観察」「星座観察」「距離の測定」「天気図」「気象予測」の9項目が下位ランクで一致した。現在のキャンプ実習のスタイルでは、生活指導インストラクター程度や一般的プログラムの運営・指導程度ならば、実行力・指導力の獲得も可能ではあるが、知識や技術の量が獲得されなければ実行・指導が不可能なプログラムについ

ては、時間的制約を解消していく必要性のあることが本年度も指摘され、2～3回程度のキャンプ経験プラス本学科キャンプ実習参加程度では得られない知識や自信を獲得させられるだけの、物理的時間確保の問題は、事前教育量を増やした本年においても大きな課題と言えた。

4. 満足感・達成感を構成する要因

満足感・達成感を構成する要因について因子分析を行ない検討した。

4年目の分析も、主因子法を用い、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転実施の後、因子構造を得た。因子数の決定は、基本的に因子の固有値が1.0以上のものとしつつ、スクリーカーブを参考に行なった結果、昨年までと同様に6因子を得ることとした(Table 10)。因子の解釈および命名は、回転後の因子負荷量が0.5以上の項目に着目し、松田の研究⁹⁾と昨年までの研究^{10) 11) 12)}を参考に行った。

第1因子は、10.「指導力は十分発揮されたか」、9.「積極的に指導しあったか」、8.「自分の意見が友人に理解されたか」、3.「参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか」、21.「担当プログラムに創意工夫がなされたか」、2.「専門的な知識と技能は発揮されたか」、30.「担当プログラムに不安なところはなかったか」、7.「疲労しなかったか」、22.「共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか」、6.「不平不満はなかったか」、1.「グループ生活によく適応したか」などの項目の因子負荷量が高い。因子を代表する項目内の主要なキーワードは、「指導」「発揮」「積極的」「理解」「友人」「担当プログラム」「創意工夫」「適応」「清潔・整頓」「疲労」「不平不満」などであり、第3報の検討結果と類似する点が多い。自分に課せられた担当や役割をよく認識し、自己の義務や責任をよりよく遂行しつつ、共同生活者に対する配慮の姿勢がうかがえることから、この因子を第3報同様「相互指導と配慮」と命名した。

第2因子は、37.「公平で親切であったか」、40.「民主的な生活が実行されたか」、39.「担当プログラムは民主的に運営されたか」、38.「参加者の保健安全面に十分留意したか」、35.「共同生活者や友人の健康に気を配れたか」、41.「よい習慣はついたか」などの項目の因子負荷量が高い。因子を代表する4項目が、第2報の第3因子と一致しており平等性が強く感じられる。よって、この因子を第2報同様「公平と民主」と命名した。

第3因子は、49.「実習は得るところが大きかったか」、50.「機会があればまた参加したいと思うか」、48.「日数や時期はよかったか」、47.「野外活動は楽しかったか」、46.「これからもやりたいことが見つかったか」などの項目の因子負荷量が高い。因子を代表する5項目の全てが、第1報の第4因子と一致しており、活動を肯定的にとらえ参加意欲が向上している傾向が強く感じられる。よって、この因子を第1報同様「触発と参加意欲」と命名した。

第4因子は、15.「創意工夫して、仕事をなし遂げたか」、14.「積極的に協力して仕事をしたか」、34.「友人と協力することができたか」の項目の因子負荷量が高い。よって、工夫・協力して積極的にことを成し遂げようとする取り組みの現われと解釈し、「積極的な協力和工夫」と命名した。

第5因子は、45.「キャンプソングは楽しかったか」、23.「友人と仲よく生活できたか」の項目の因子負荷量が高い。この2項目だけでは解釈することが困難であったため、2項目に続き比較的因子負荷量の高い項目にも着目してみた。17.「ゲームやスポーツは楽しかったか」、44.「意地悪をしなかったか」などの項目が浮かび上がり、友人と和気あいあいとした雰囲気の中で活動を楽しんでいる様子が見え、よって、この因子を「楽しさの共有」と命名した。

第6因子は、16.「実習中病気をしなかったか」、25.「実習期間中の健康状態はよかったか」、26.「実習中けがをしなかったか」の項目の因子負荷量が高い。明らかに実習中の自分自身の健康状態を指し示す事柄であることから、「自己管理と健康状態」と命名した。

したがって、第1報では、「安定と安心」「交流と相互指導」「積極性と達成欲」「触発と参加意欲」「健康状態」「集団生活への適応」の6要因、第2報では、「義務や責任の遂行」「交流と自己の満足感」「公平と民主」「自己の健康状態」「心身の安定」「実習の適切さ」の6要因、第3報では、「相互指導と配慮」「担当プログラムと満足感」「触発と参加意欲」「自己の健康状態と安定」「活動量の適切さ」「プログラム指導と不安」の6要因、今回は、「相互指導と配慮」「公平と民主」「触発と参加意欲」「積極的な協力和工夫」「楽

Table 10. 達成の構成因子

N = 102

質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	Mean	S.D.
10. 指導力は十分発揮されたか	0.758	0.155	0.206	-0.201	0.142	0.118	3.57	0.94
9. 積極的に指導しあったか	0.735	0.162	0.207	-0.279	0.141	0.159	3.81	0.88
8. 自分の意見が友人に理解されたか	0.677	0.201	0.225	-0.326	0.238	0.113	3.77	0.88
3. 参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか	0.652	0.207	0.316	-0.019	-0.011	0.003	3.68	0.89
21. 担当プログラムに創意工夫がなされたか	0.648	0.140	0.352	-0.204	0.372	0.022	3.98	0.87
2. 専門的な知識と技能は発揮されたか	0.620	0.194	0.286	-0.292	-0.045	-0.002	3.80	0.81
30. 担当プログラムに不安なところはなかったか	0.574	0.454	0.235	0.100	0.248	0.105	3.62	0.87
7. 疲労しなかったか	0.562	-0.049	0.201	-0.030	0.084	0.146	2.76	1.16
22. 共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか	0.560	0.212	0.158	-0.382	0.224	0.272	4.08	0.83
6. 不平不満はなかったか	0.520	0.221	0.039	-0.190	0.273	0.073	3.48	1.13
1. グループ生活によく適応したか	0.518	0.239	0.135	-0.392	0.277	0.177	4.17	0.81
37. 公平で親切であったか	0.047	0.784	0.235	-0.202	0.238	0.068	4.23	0.73
40. 民主的な生活が実行されたか	0.161	0.766	0.244	-0.225	0.044	0.105	4.13	0.67
39. 担当プログラムは民主的に運営されたか	0.309	0.762	0.131	-0.171	0.125	0.116	4.07	0.72
38. 参加者の保健安全面に十分留意したか	0.218	0.712	0.157	-0.126	0.168	0.149	4.08	0.78
35. 共同生活者や友人の健康に気を配れたか	0.179	0.555	0.104	-0.397	0.349	0.258	4.23	0.82
41. よい習慣はついたか	0.178	0.530	0.368	-0.096	0.099	0.200	4.40	0.66
49. 実習は得るところが大きかったか	0.223	0.244	0.771	-0.130	0.089	0.090	4.21	0.79
50. 機会があればまた参加したいと思うか	0.335	0.107	0.728	-0.240	-0.009	0.059	3.62	1.20
48. 日数や時期はよかったか	0.202	0.044	0.726	-0.148	0.114	0.083	3.80	1.07
47. 野外活動は楽しかったか	0.210	0.251	0.698	-0.251	0.132	0.065	4.19	0.81
46. これからもやりたいことが見つかったか	0.227	0.309	0.550	-0.052	0.135	0.045	3.66	0.91
15. 創意工夫して、仕事をなし遂げたか	0.378	0.155	0.259	-0.661	0.112	0.106	4.27	0.80
14. 積極的に協力して仕事をしたか	0.286	0.255	0.314	-0.649	0.062	0.020	4.28	0.71
34. 友人と協力することができたか	0.324	0.293	0.216	-0.519	0.425	0.320	4.45	0.75
45. キャンプソングは楽しかったか	0.219	0.267	0.092	-0.094	0.570	0.140	4.30	0.82
23. 友人と仲よく生活できたか	0.300	0.330	0.151	-0.479	0.551	0.206	4.41	0.83
16. 実習中病気をしなかったか	0.054	0.109	-0.126	0.021	0.123	0.602	4.46	1.06
25. 実習期間中の健康状態はよかったか	0.118	0.056	0.150	-0.148	0.255	0.584	4.36	0.85
26. 実習中けがをしなかったか	0.222	0.153	0.083	-0.054	-0.152	0.548	4.47	0.96
42. 睡眠は十分だったか	0.053	0.310	0.258	0.099	0.111	0.481	4.21	1.02
19. 食事はよく食べられたか	0.100	0.023	0.164	-0.222	0.182	0.439	4.67	0.62
43. 諸活動は自分の身体に無理なく行えたか	0.198	0.281	0.431	0.006	0.016	0.393	4.17	0.92
33. 野外活動は健康のためよかったと思うか	0.413	0.233	0.222	-0.125	0.169	0.345	4.19	0.83
32. 恥ずかしくなかったか	0.347	0.176	-0.069	-0.267	0.173	0.337	4.03	0.97
44. 意地悪をしなかったか	0.006	0.343	-0.084	0.073	0.449	0.306	4.41	0.87
28. 協同精神の発揮はできたか	0.466	0.346	0.221	-0.445	0.196	0.305	4.22	0.73
17. ゲームやスポーツは楽しかったか	0.122	0.071	0.295	-0.238	0.485	0.297	4.45	0.70
18. 責任感と義務遂行力は高かったか	0.469	0.091	0.176	-0.469	0.338	0.288	4.12	0.72
31. 野外活動の一般的知識を得たか	0.420	0.405	0.162	-0.277	0.077	0.269	4.22	0.67
24. 積極的に話し合いに参加し発言できたか	0.496	0.239	0.036	-0.433	0.387	0.257	4.14	0.86
29. 参加者を平等に取り扱うことはできたか	0.470	0.469	0.092	-0.327	0.271	0.243	4.03	0.83
36. ハンドクラフトは楽しかったか	0.127	0.367	0.369	-0.065	0.270	0.202	4.38	0.77
5. 定められた規則が守られたか	0.453	0.462	0.079	-0.183	-0.027	0.199	4.08	0.73
20. 参加者と接触の機会は多かったか	0.463	0.044	0.194	-0.055	0.382	0.178	3.90	0.89
27. 自然観察は楽しかったか	0.379	0.252	0.316	-0.234	-0.103	0.169	4.33	0.74
4. 身のまわりの清潔・整頓は良く行われたか	0.416	0.174	0.116	-0.290	-0.057	0.146	4.01	0.81
12. 担当プログラムに興味と欲求は満たされたか	0.454	0.098	0.496	-0.153	0.399	0.050	3.92	0.87
13. 食べ物について好き嫌いはなかったか	0.095	0.075	0.073	-0.408	0.046	-0.025	4.10	1.10
11. 新しい友人ができたか	0.261	0.130	0.295	-0.239	0.394	-0.109	4.23	0.94
2乗和	7.841	5.479	4.785	3.976	3.198	3.101		
寄与率(%)	15.68	10.96	9.57	7.95	6.40	6.20		

しさの共有」「自己管理と健康状態」の6要因ずつが抽出されたことになる。4ヶ年を総合した分析からも、「相互指導と配慮」、「公平と民主」、「触発と参加意欲」、「共同生活」、「自己の健康状態」、「活動量の適切さ」の6要因が抽出され、第2報で指摘した実習の成否および今後の研究のポイントをにぎるであろう、「民主・公平のものと義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」の6要因は、今回も支持されたものと判断した。

5. 自然・野外活動に対する意識変化

岸ら¹³⁾が作製した「自然活動実習アンケート」を本年も実施し、実習前後の回答傾向の違いについて検討した(Table 11.)。

Table 11. 自然や野外活動に対する意識の変化

N = 102

項目	実習前		実習後		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
＜自然について＞						
1. 自然の中では気持ちが安らぐ	4.39	0.72	4.30	0.79	1.154	
2. 自然の中では楽しい気持ちになる	4.11	0.83	4.18	0.85	-0.796	
3. 自然の中は心地よい	4.39	0.73	4.22	0.91	1.992	*
4. 自然は変化に富み魅力的だ	4.04	0.82	4.24	0.83	-2.170	*
5. 自然は人間の力を超えた偉大なものだ	4.25	0.87	4.53	0.69	-3.338	***
6. 自然は優しい	3.82	1.00	4.10	1.02	-2.965	**
7. 自然は調和的だ	3.83	0.88	4.12	0.88	-3.252	***
8. 自然はなくてはならない大切なものだ	4.75	0.50	4.72	0.64	0.479	
9. 自然を積極的に守っていききたい	4.47	0.61	4.63	0.66	-2.414	**
10. できるだけ自然と接する機会を持つようにしたい	4.29	0.79	4.45	0.83	-2.361	*
＜野外活動について＞(野外活動は、)						
11. 心や身体の緊張をほぐしてくれる	3.57	0.87	3.92	1.02	-3.458	***
12. 未知の体験を味わう喜びや楽しみが多い	3.90	0.86	4.25	0.86	-3.925	***
13. 他人と心を通わす良い機会だ	4.09	0.86	4.37	0.84	-2.996	**
14. 自主的に考え積極的に活動する意欲をかきたてる	3.78	0.85	4.35	0.73	-6.576	***
15. チャレンジ精神やたくましい精神力を養うことができる	4.02	0.81	4.49	0.66	-5.998	***
16. 助け合い、協力し合う態度を身につけさせてくれる	4.27	0.68	4.50	0.70	-3.539	***
17. 深い感動を与えてくれる	3.76	0.91	4.34	0.84	-6.528	***
18. 創造性に富んでいる	3.76	0.89	4.26	0.77	-5.364	***
19. 規律のある生活態度を身につけさせてくれる	3.94	0.83	4.46	0.68	-6.071	***
20. 自分自身を見つめ直すよい機会だ	3.80	0.97	4.38	0.83	-6.528	***
＜共同活動について＞(他者との協同活動は、)						
21. よろこびや楽しみを与えてくれる	4.13	0.78	4.37	0.84	-3.299	***
22. 安心感を与えてくれる	3.70	0.93	4.09	1.02	-3.897	***
23. 大きいことを成し遂げさせてくれる	4.09	0.81	4.42	0.81	-3.969	***
24. いろいろな知識や技術を得させてくれる	4.11	0.74	4.46	0.78	-4.907	***
25. 自分の力を引き出してくれる	3.78	0.80	4.13	0.89	-4.134	***
26. いろいろな考え方を学ばせてくれる	4.22	0.70	4.53	0.67	-4.598	***
27. 自分の責任や役割を自覚させてくれる	4.25	0.71	4.51	0.73	-3.311	***
28. 他者の存在のありがたみを感じさせてくれる	4.31	0.70	4.49	0.82	-2.297	*
29. ルールやマナーの大切さを実感させてくれる	4.25	0.68	4.48	0.78	-3.539	***
30. 互いの立場の理解を促してくれる	4.11	0.76	4.39	0.80	-4.220	***

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

(中村)

結果、30項目中27項目の平均値が向上しており、〈自然について〉の質問項目では10項目中6項目に、〈野外活動について〉の質問項目では10項目中10項目に、〈共同活動について〉の質問項目でも10項目中10項目に、有意な差を持った向上傾向がうかがわれた。しかし、〈自然について〉の質問項目のうち1.「自然の中では気持ちが安らぐ」、3.「自然の中は心地よい」、8.「自然はなくてはならない大切なものだ」の3項目は実習終了後の平均値が低下しており、中でも3.「自然の中は心地よい」の項目の平均値は、有意な差を持った低下傾向を示した。

本年も、〈野外活動について〉の回答傾向から予測された、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していることや、〈共同活動について〉の回答傾向から予測された、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていることについては、昨年までと同様、キャンプ実習自体の効果と判断できたが、〈自然について〉の各項目に対する回答傾向から、アウトドアスポーツにつきものの、天候による影響をコントロールする困難性が新たに顕在化した。

4ヶ年の総合した分析でも、上述同様、野外における活動は天候による影響を直接受けてしまうことから、活動の良し悪しをコントロールする困難性について回ることは否めないことが指摘される。一昨々年は、2つの解釈を示し判定の難しさを指摘し、昨年は、「本実習のスタイルでも、自然に対する理解や好意に関する面への効用は、充分期待できる」と結論したが、自然への好意に関する部分の評価は、各年の天候によって違いが生じてくるもので、野外活動の実施、即、好結果とは限らないものと結論する。

まとめ

研究目的に、養成課程に存在する組織、指導者、プログラム、施設・設備、実習生に関わる質的向上の問題解決を置き、継続研究を予定した。

第4段階となる今回は、4ヶ年の比較検討と4ヶ年を総合した検討を実施した。目標は、昨年までと同様、各実習に存在する最大公約数の解明と、過去3報の指摘から、本年度より導入した事前教育の時間・回数の増加による効果の把握を行うものとした。結果から以下のことを指摘し、まとめとする。

1. 参加料金の安さと単位取得を優先した実習選択をし、日常、擬似的にでも体験することが困難な活動をとおして、友人と楽しみを共有したいとする立場は、4ヶ年も揺るぎはないようであり、参加者の普遍的意識と推測した。昨年の傾向は消失傾向にあり、一昨々までの傾向である「楽しみ」「安全」「平和」志向が強めに現れたことから、実習に対する取り組み方や積極性については、学年間においてレベル差が生じることが明らかとなった。
2. 経験は、本年も1人2～3回程度と解釈された。技術に関しては、学校が主催する活動への参加者が多い場合、皆がほぼ同様な経験を有し技術を獲得している可能性が高くなるものと推測され、昨年とは逆の傾向がうかがわれた。事前学習量増加の効果については、昨年までと同様の結果としか判定できず、1～2回、1回90分ほどの延長程度では、著しい効果は得られないことがうかがわれた。一様に自覚すべき事柄についての検討が優先され、内容・方法が吟味されるべきと判断した。
3. 実行力・指導力の獲得については、上位と下位にランクされた項目は4年間ともに変動幅は少ないが、中位にランクされた項目は変動幅が大きい。中位にランクされた項目は、天候や雰囲気の影響されやすくその力量が試されるプログラムといえ、各年ごとにその評価は違っていった。力量の獲得については、2～3回程度のキャンプ経験プラス本学科キャンプ実習参加、加えて事前教育量を増やした本年においてもその量は足りず、時間的制約解消の必要性が再び指摘された。
4. 満足感・達成感を構成する要因について因子分析を行ない検討した。結果、今回は「相互指導と配慮」「公平と民主」「触発と参加意欲」「積極的な協力と工夫」「楽しさの共有」「自己管理と健康状態」の6つの要因を抽出することができた。
5. 自然に関する質問10項目中6項目に、野外活動に関する質問10項目中10項目に、協同活動に関する質問10項目中10項目に、有意な差を持った向上傾向がうかがわれ、今回も本実習における高い

授業「キャンプ実習」に関する研究(4)

効果の存在が証明された。新たな問題として、自然に関する質問の回答傾向から、アウトドアスポーツにつきものの、天候による影響をコントロールする困難性が顕在化した。

文 献

- 1) 中村哲士・保井俊英・會田宏・小柳好生・田中繁宏・永戸久美・四元美帆・野老稔, 武庫川女子大学紀要, 52, 66 (2004)
- 2) 前掲 1), 74 (2004)
- 3) 中村哲士・保井俊英・會田宏・小柳好生・田中繁宏・永戸久美・四元美帆・野老稔, 武庫川女子大学紀要, 53, 41-42 (2005)
- 4) 中村哲士・保井俊英・會田宏・小柳好生・中西匠・永田隆子・田中繁宏・西坂珠美・松岡紗也香・野老稔, 武庫川女子大学紀要, 54, 48 (2006)
- 5) 前掲 1), 66-67 (2004)
- 6) 前掲 1), 67 (2004)
- 7) 前掲 1), 67 (2004)
- 8) 前掲 1), 68 (2004)
- 9) 松田稔, ザ・キャンプ—その理論と実際—, 創元社, 146-152 (1981)
- 10) 前掲 1), 71-72 (2004)
- 11) 前掲 3), 38-40 (2005)
- 12) 前掲 4), 45-47 (2006)
- 13) 岸楯夫, 自然活動入門—教養としてのアウトドア—, アイオーエム, 128-131 (1992)